女訓玉文庫

福壽百人一首

全

天智天皇
秋の田の
かりほの
庵の
苫を
わが衣手は
露にぬれつつ
右 紀貫之
揚ちる
雲ちぐ風
ゆきぞあらそふ
左 凡河内躬恒
いづくとか
春の日の
ゆくへ
みすらん
なほ
春ぞ
ゆく

大伴黒主
僧正遍昭
文屋康秀
喜撰法師
在原業平
小野小町

右 山賤赤人
左 中納言家持
右 伊勢三郎
左 業平朝臣
右 僧正遍昭
左 素性法師
持統天皇
柿本人麿

右 紀友則

友則

右 猿丸太夫

猿丸

右 小野小町

小町

山鳥赤人
田子の浦よ
打出て
見れば
白妙の
雪は降ける

右 中納言朝忠

朝忠

右 中納言敦忠

敦忠

猿丸太夫
奥山に
紅葉踏
鳴
鹿の
声聞くときぞ
秋は悲しき

右 菅原道真公
かくばかり
なげくとは
世の中に
うやむしくも
すめる月かな
左 源宰相
ゆきやぐら
雪そう
今一度の
きくまりきに
右 壬生忠岑
ふの日の
のべの
小雪ふるせば
ふるの
左 菅原敦行朝臣
妹きぬと
めふはさや
月の
風のさわぎも
右 大中臣能宣
ひとふふ
ふるの
松かれば
つきの
左 藤原公任
琴の
雲間
神宮女郎
中納言家持
かくばかり
涙をる
指
とく
雪の
ちりさと
庭そ
安倍仲麿
天の原
ふりさけ
見
雲
みるさの
出し
月

右 源重之
岩うつ
滝の
左 源宗于
右 源信明
喜撰法師
我いおを
都乃
宇治
山
人いとふ
左 菅原道真
左 源順
左 菅原輿風
小野小町
花の色
うつりにけりな
いたづらに
わが身よにふる
ながめせしまに

蟬丸
あまそもの
ゆくも
ゆくも
おぼつかな
逢坂の関
右 清原元輔
坂上是則
右 藤原仲文
右 大中臣能宣
泰議篁
和田の原
海人の釣舟

右 千里忠見
右 平兼盛
右 中務
僧正遍昭
天津風
陽成院

吉書詩歌
赤辰今月
河原左大臣
みちのくの
しのぶ
摺
雅也人
乱き初
我なれるよ
七
今日
不
春風
一時来
紅
光春天皇
雲の
出
若
菜つむ
我
衣
ふり

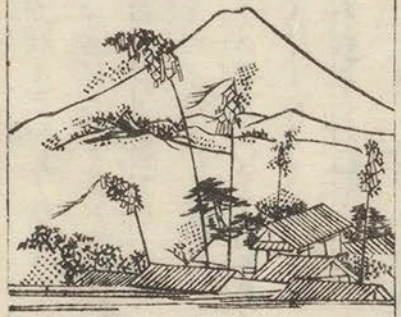
中納言行平
在原業平朝臣

七夕清滑

水得少年
長久の
竹早
紙上
糸線
柳くくりて
ゆきの衣を
しきうつす
うくすぐめるや
そくひ
風流
疾
霧及
明
不禁
あさくぬ
琴引
天の川
手漕ぶさ
人目
ぐら
春

藤原敏行朝臣

住の江の
きしによる
波
さへや
夢の
かよひ路
人目
よくらん



雲霧
山
風消
鳥
鶯
柳
連
浦
往来
手
ごろ
あ
ま
ハ
ま
だ
れ
ぐ
こ
の
め
る
よ
の
う
ぐ
ぞ
さ
く
ふ
う
く
ふ

伊勢

難波
み
ま
の
ま
ま
に
ま
ま
や

ちびりうんあらぞつき
ゝうぐこれとしふせとび
あつてゝ
天川のおきとらびるゝ
この秋やわすれ紅葉の
くしとなりゝむ
まおぐこふんぐゝ人や
うふくん今ゝいまの
うゝうけり
竹のゝふまるゝ
ゝあづさう
天川を
あるゝとおどゝ

天川なごゆ月
ゝゝ
七夕の逢ふ夜の
おく琴のあらむひゝ
ちゝぶふのいと
ゝのとまれゝ
ゝとせてたれ
ゝをまゝん
ゝの月
きうげゝそ
ゝぎのゝ
ゝ
ゝ

七夕糸乃歌

七夕といひつたへ牽牛織女の二星なれどもくるしからぬ男女なれども其星こゝろの女なれども其織女とうの今乃世に絵くこゝ絵なるに牽牛といふえよりく軒を書る風情を書一体ともいはれ難し星といふにて牽牛に成ぬ成ぬ成ぬ乃歌を麗士れ成ぬ成ぬ成ぬ

源氏書の圖引歌

来栖花
紅葉
花菖蒲
菊
貞信公
小倉山
紅葉
今こそ
仏わらい
帝安産
中納言兼輔
見わたせば
春の
泉川
いづみ
きくらく
ちひろかな

源宗于朝臣
山さとは
冬ぞさびしさ
まさりける
人めも草も
かれぬと思へば
源重之
いせおの海人
思ひやる
もしほ
鳴石
おきの浜
つきもその海
我こそは
ちよ井と
ほのまもらん
霞標
ひとしほ
なりぬ
ひろ
月と
みるらん
墓生
ふるさとは
わすれて
ものの
仙成
関屋
逢坂のせきや
いるれる関
備合
そのおりより
元河行幸
あ
ん
の
を
あ

松風
落雲
乙女
玉葛
初音
坂上是則

春道列樹
山川の
風の
うちする
ちからこそ
淵もあへぬ
もみちなりけり
蝶
蛍
常葉
十六

紀友則
久かたの
ひかりの
のどけき
春の日に
しづこころなく
花の散らん
野分
御幸

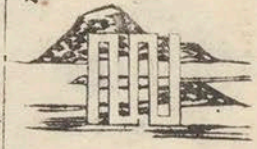
蘭
梅枝
藤原真風
誰をも
知る人は
せん
高砂の
松もむかしの
友なるかくし
十七
紀貫之
人をいさ
心も知らず
古里は
花ぞむかしの
香にほひける

清原深養父
夏は夜は
まだ宵
ながら
明ぬる
雲のいづこ
月宿るらむ
文屋朝康
白露に
風の
吹
秋乃野
つゝぬきこゝぬ
玉ぞ散
夕寄
山田
清法
幼

白雪
和梅
作川

椿姫
椿
徳角

早蕨
菊本
東屋
浮舟
蜻蛉
鬼灯
平菓盛
壬生忠見



右圖ところは源氏六十帖の秋の夕の巻なり桐壺源氏の御父のおろかに御院の御門上東門院へ参り給ひ菊紙や行ると云ふ人はかたをもかりて御世話にのう通産一くるはい八月十五夜の月ゆゑ御ようり心清くるまろ酒盛ゆゑ上皇をかけ酒ゆゑ
くるはるる御ようくに平巳
此と成り成り清ちゆゑ御院へ来
らせるもろくゆり

清原元輔
ちぐるをきれ
うるんに
袖と
ちぐ
ぬつて
末のまつ山
波こすことは

孝子第の要録

夫婦人倫始まる孝子第
昌の基なり夫婦いつくも月日
を切りて子そぶら一寸足
ぶちせ子月日と紙ぶ先せを
月ふゆきまろ二とうとぶ事ふ
うきくきくきくきくきうる
今日と来ふ手ぶふ月と動
うて神と休めど屋古ふい
絵ねとて仁義自然の道
と孝行ぶ
ふくまるこ八孝子絵伝とふ
伝ゆきまろ八ふ孝子伝是
つまとて涙こるきくのとを

中納言敷ふ
童見く
の
後ち
心よ
ふ
ふきい
むつ
い物と
おりんざう
々祭

こゝぞ人さら[illegible]
[illegible]
[illegible]

一九ケ月めの九月朔日と
ゆくさきを小九ケ月くらゐき
寿帰ひとり俳べー
又生見まつとやうと
ことを考へこまも此の
人と死ずしく寿帰
ひとり俳べーやきと
私の為る呪ひ
一緒寿帰るとき殺せ
こまーさんーさん後ホ
殺ちゆけと又ときき後
又ときもんそ津老
あるひなのがみてもくる
ろーさんこはつうこせ
ほくどひのきも寿帰

當麻好忠

中京の
戸を
ゐる
私
人
かちゆくこえ
月赤もちゐね
京乃百うね

寿帰おうこさね
たいさま川と
あひうし年ぞ
うろこかき魚うふ
こんぶ大こ山口もち
ねこけ ムさびれ ひぎ

恵慶法師

八重葎
繁る
やどの
淋
しきふ
人こそ
見えず
秋来きふける

めんるい子の粉屋じし
こんやく くるま すり
めんぎ かー うどき
みゝうん 粉ときかー
つゝひも 地ごしきこの
くさえもの あひくきの
ゐゝまつ ゑべー 別ー
粉ふきごんえもるー
さんごわきゝの
たい ゑた ぬゝ
ゝびゝ ゝぐゝ うすび
そむ えんく えんやく
いも えんせう こせう
ゐゝけ さけ す
こんぶ こけん こぶこの

めんるい うさ
日 岩井
男女の中ゝうつくしきある人
ぜいきとつくもと
あぐろくゝ
ゐく 松ぜきくく ぐゝうけん
つやくゝ 年 ゑ ゑとしやき
ゝもとくきゝ ゝ ゝ ゝ べー

さんごよさまの
おい　牡蠣　するめ
くげ　とびうを　ますす
え　もも　きすご　ひくり
むぎ　あづき　ちさ
んが　わふ　いものこ
ぶだう　わぢやき
たるる　れこめぶ　ゝ
○さんご三月ふあ
ひと　ぶ　ら　ぶ　ー　ま　く　ぶ
ハあ　ー　か　く　な　ー　ま　け　ど
ま　く　あ　き　さ　ら　れ　と　ら　ひ
てあ　ま　ー　ぢ　と　い　ま　り
○さんり　ハ　ー　さ　ま　ま　ま　ま
仁　ま　ま　て　ま　ま　ま　ま　ー

藤原義孝

掛香之方

一竜脳　一麝香　一甘松　一白檀　一沉香　一麝香　一白檀　一沉香　一麝香　一麝香　一甘松
一麝香　一甘松　一白檀　一沉香　一麝香　一白檀　一沉香　一麝香　一麝香　一甘松
揉茶　一揉仁　一丁子　一白檀　一菊花　一沈脳　一丁子　一甘松　一丁子　一麝香
八匁　一丁子　三匁　二匁　一匁　二匁　一匁　一匁　一匁　一匁　一匁
一匁　二匁　二匁　二匁　八匁　一匁　八匁　八匁　二匁　二匁　三匁
名方　一沈脳　一甘松　一麝香　一沈香　一丁子　一麝香　一麝香　一麝香　一麝香
一匁　一匁　一匁　一匁　一匁　一匁　一匁　一匁　一匁　一匁　一匁

右薬味製法

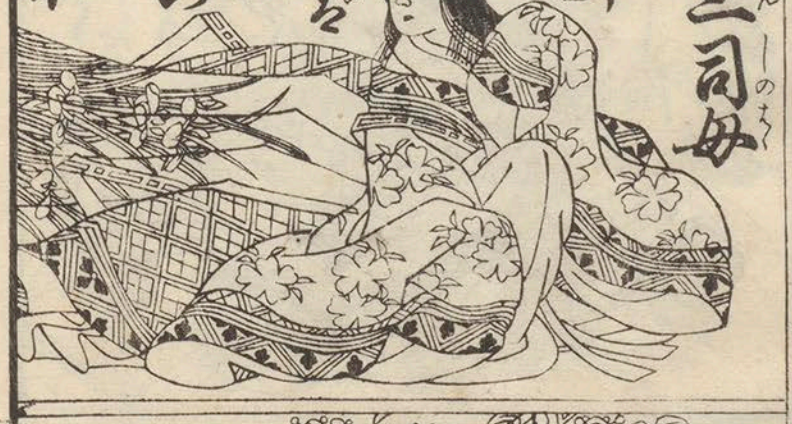
一麝香　紙一上つゝそ入
一沈のふ　右一回し
一白ぼん　こなゝく刻
一沈香　同じ
一藿香　右ぜんぶ粉末にして用
一肝煎　あらくこなの
一ちゞ　こなゝく刻
一梅仁　同じ
一菊花　紙につゝみ一ヶ月
　　日とうけとく

右之方法

○ふ神上つゝぶくれ出るとき
一外上塩一合へよく混ぜ
さきして上つゝ入
潤ろの粉とろりやけ紙とゝ
て火のとろく炙
○ろくれ出るハみそけ
をこう　あゝ
○田たこのやにの付くこと
ゝそけこそ上つゝ
○雨ぬとりのかゝとくろ
塩ゆこてあゝ
○うを乾乃血ぬぶれ
ぬ出るハかゝのけこそ
あゝ血を
○人乃血乃付るハ生姜

右之方法

うもくるをたてうへをとを
ゆをしかをゆるうりて
おつるをうゆををものう
付をるハ燈ゆ紙つをたをて
めしもをべー
○おをぐるの乃付をるハ
茶乃敬紙せんーて
ーをべー
○をるのをれつをるハ
どぢのうれ茶うをあべ
○をぶ乃ほたるハをう
をんをせんーーをべー
又乃ほぶーをれ
又をけをうー又茶乃
をくををををるをう



○をを人だ紙とをるを
下地ををーーのををを
ーうやを二をんをけ人の
ーあにいーうやをにめをん
ハをををめーーー
○ををーあけ紙ハをんげー
をを三のけををををるを
○をーををんをやーをトをあ
をむめれをるにを二をん
をを人にをかをを一ノ
隙ーあにかをを乃をる
ーめーをんーーかをみを
ゆをしをあり
○をーををやををむるハ

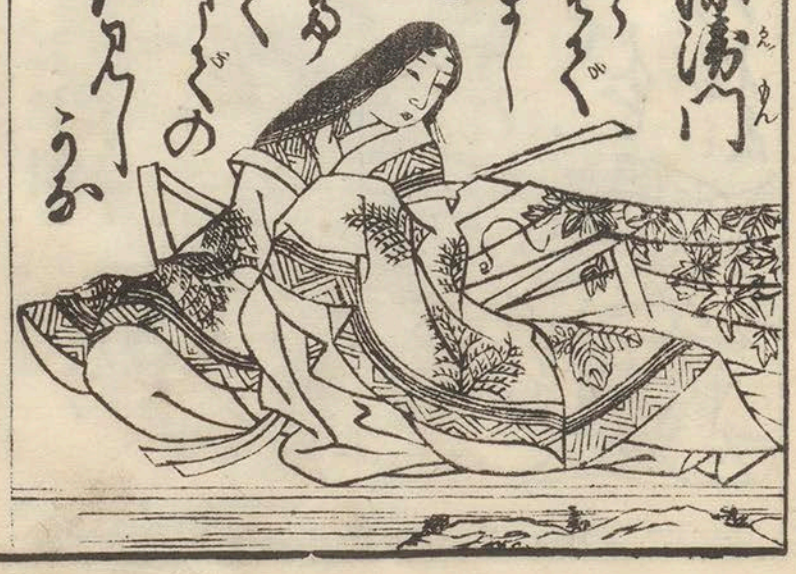
和泉式部
あくがれむ
このせれ
外乃
物も
ひ
出よ
今てひの
逢こもの邪

紫式部
めぐりあひて
見しやそ
れとも
分ぬまに
雲隠れ
ぬ
月かな

諸病めつ尽く

○面てんの乃やまひに八白粉よ
をさけてひさしくなて教す
いつ切万病治する方
又茅ふきまぜこもゆあり
○新乃くろ黒しハ赤前其実
を粉にしく新仮ちくひ
又丸ごて食てしく妙く
○あくびとそもろれハ裏大豆
を磁みてせんじびあり
用べし又びくろ丸ぢもし
○髪ぬけ黒ハ
ハ水ひしびんあふ
○のせぼくこん虎ろ貝を
やけうどん乃粉とまぜ

布に包ふりかけてし
○ふきびよハ寒陀僧乃
粉を乳ことに孫さあ
ゆりてなる月法ひけべし
ぢ又なるてゆあり
○毛もれハ赤よ乃乃ぢ
とひとりしぬせ代あし
又六月廿 十六日 廿六日
のひとぬくりぬくりぬ
月ぬ新 ぬそぬすぬ
○ひぐに棘乃実仮
ユもり件とつけくし又
うハのぬぞあふもし
○あざハ六月ニぬるぢを
ちりこやたれてぬ戻
ゆあ一あこせぬぬて



小式部内侍
大江山
いくの
野の
みち
とをれば
まだ
ふみも
見ず
天の橋立
伊勢大輔
京の
の花
八重
ふく九重に
ゆかしかるらん

初月	上十	一二九十八	九～六～
		三四五八	五～八～
		六七八八	七～四～
死月	中十	一二九十八	八～八～
		三四五八	七～四～
		六七八八	九～六～
初月	下十	一二九十八	七～四～
		三四五八	九～六～
		六七八八	八～八～

新衣服着初吉方

清少納言

秋をあはれと
ながめ
ぬる
あい
はるる
もの
あはれさ
の
関い
ぶる
さま

鏡の由来

鏡は天照大神白河の御ことばにくらせの御宮の内に安置我と
見るあらくさぐくしくこそ
ひとつく御神鏡とも八咫
のかがみ
第十代
崇神天皇の御ときに天孫
の御威と
磯城の殿に宮居と
内裏の御神鏡
天徳四年九月内裏焼
のこり御鏡
内侍神
鏡と
内侍

相模を
宇治の川
さえくよ
解きけるる
浦の細代
本

あるこゝろをもつて人間世界の法義
生れくるより七日ゝを二七日を
つゝ氏日高紙付孝ぎ和をきせる男八左の袖ゝをとゝ女
八右の袖ゝをとゝ紙すゝ
ゝ
ゝ

男女名類
一三條流
純園法師

良運法師
大網長繩信
夕ざれい
門田出
いるぶ
きく
のま
ろやよ
ぬく

水性
魂
お中納言通房
高砂乃
尾上の
桜よりも
なほ
のうつくし
きもわかるなん

男女和性考

○男女共に子を大人にそだてんとおもふ
はゞ子だつてあるとても
いのちをしい位なものさ
自然とまろうそとよ
其のさうもうごとく
いろ〳〵のくれる神のむたいそ
おもふまゝなる子をそだてんと

源後頼朝卿

うつくしき
人を
和性
の
ふかい
ちけ
いきとは
いはれぬものを

○男女共に子を大人にそだてんとおもふ
はゞ子だつてあるとても
いのちをしい位なものさ
自然とまろうそとよ
其のさうもうごとく
いろ〳〵のくれる神のむたいそ
おもふまゝなる子をそだてんと
ちゝやうの神もあれば
いきのうちとたのむわゞみと

○男女共に子を大人にそだてんとおもふ
おやゝんかもしも子をもんかり
まつかもしも年わる神はようへしと
いつ迄もこそかなのへうかもれ
よろづのたゝりをわりゝ絲い

藤原基俊

歎をきさ
ぶ
をが
命をく
ちの
絲もいぬりり

○男女共とてもかくてもの
ちのよのなかにんげんはせいぜんとくせうわるべしわるいことをしてもあるせばきみとはしらるまじし
○男女共水をくみ人
ふねをうく命なりとも井
をもうけうてんをふ縁あり
うつくしいふうふ和合
せいこうをぬりてくれ
徳川家康公
和田おもう
漕出く
ふれい
久しきの
雲井よりまつふ
知さし川ちかこ
○男女共女ちやうふ
八九人もあるべし和なり義なと
まつ人ハ後年ハ
わひそあ山とふ
きふがなさりのふ
○男女共美人ろうすく衣
今ハもふすぐ紅ろう粉と
ひのそう
ひとりべ
かくれもわそびよのあるべやき
○男女共女ちやうふ
八九人もあるべし和なり義なと
まつ人ハ後年ハ
わひそあ山とふ
きふがなさりのふ
紫憲院
瀬をもとめ
岩ふ
ちく
滝
川の
ち
ちあ
あんとそ

○男女共女郎花ゝ二人
○男女共女郎花ゝ二人
源兼昌
清盛嶋
秋風よ
月の
新乃さやけさ

うづらむ
ん
も
ち
ど
黒髪の
うづまきそ
けさは
物ぬけそ
侍賢門院堀川
後徳大寺左大臣
ほとゝぎす
なかなくこえを
きくかの
月ぞ残れる

○男金女金大ふうしまの人
卸人あるべしやひとうをも
大神を祈ずべし後かろし
いふせんかうさいれもまを
よきへやかきやまひこう

○男金女大ふうしまの人
ろうきこうく命ながくしん
ぐこあかし氏神と祈ぐんのまま
いくへかなるひしもひしも
きのやもくふもあうこう

乃国法師
やひ絶
くくも
命い
ものを
くくして絶ぬい
くみぐかうを

○男金女大ふうしまの人
あるべしやひとうをも
卸人ぐんのまま
女神ふうしまの氏神と
つ祈ふくくうのかぐれくへい

○男金女大ふうしまの一
人あるべしやひとうをも
うくくかうくくちぐんべ
ひくかうのぐうまの神く
つ祈ふくうのやひとぐうき

貴大后之尊手俊成
世の中よりの
くくれ
ひ出
いる
山れをくみも
廉ぞ咲
なか

藤原清輔朝臣
なげうつ人の
涙さこの
世やもの
ちのぐ
もん
うらやみうぐ
今ぞあひき
俊恵法師
夜もすがら
わがゆめ
世の
やぐ
履屋の
ひまさん
ほきとりけり

○男水女金土木の五人あつまりてこれをいきとしいけるものなり

○男水女金土木の五人ふつきあひてゆきかなたがたをなすこと
ゆきてかたちあるものなり

西行法師

あくがれいでし月やこころ物をおもふてとるかたちなるものの源なり

四月 五十歳の年

四月あくる十ねんくるとしの年ぢうよりはつかのくるとしの年なり
中比ようてんあいのきちにんの年
とりまきてきちにんの女のとしより
四つめ十めをいとりたなくば
女十七才子とこの者男女
卯どりとしあくる男卯より
辰巳午未申酉戌亥子
と女のとしとして十歳より
年のうぢふあぢ十二支を
くりていふかりうれと人をよ
四月十あくの支婦中より
家富さうるもあくあり
低四重と位ふとあるうり

叡蓮法師

むしの音の
あるあ
ゆさ
ひぬ
槙乃葉よ
夢をたちのぐる
あさけ夕暮

新改正指南令

父母　長寿十日　腰寿十日
夫　月　月
妻　月　月
嫡子　月　月
末子　月　月
妻の父母　月　月
祖父母　月　月
舅方ハ月　月
夢孫　月　月
伯父母　月　月
舅方ハ月　月
兄弟　月　月
姪　月　月
末孫　月　月

羅波江の
あしの
新枕一夜
ゆへ
身を
ぬくしてやこひしきうべき
皇嘉門院別当

孫　月　月
尾外　月　月
甥姪　月　月

十月　月　月
十月　月　月
十月　月　月

女中詞乃事

一ふるそでハ　ごろく
一おびハ　おりべ
一よぎハ　よれもの
一かやハ　かてう
一ぞんまうやハ　ぞんてう
一もめんやハ　ぞんてう
一まくらぐしハ　おろし
一ねこにハ　おいろ
一ねずみハ　おやし
一こゑハ　うちまれ
一めしハ　まびき
一ぐしハ　むし
一さけハ　九こん
一わまさけハ　あまさけ

一こぬかハ　まちよ
一ぜにたんハ　こがねぐし
一まんぢうハ　かまん
一ちまきハ　まくさ
一めしちハ　かちん
一がまちハ　おまえ
一なべのかちハ　あまちん
一ちんこハ　ちくこ
一ぐんでハ　わしく
一まわのこハ　きまこ
一なまびゝ　ろこ
一よのき　ぐらこ
一ふるびゝハ　わまちん
一そばの腹ハ　うまぐさ
一むぎハ　むり
一あるハ　かこ

一ゑのぐハ　ゑのぐ
一ゑんぴつハ　ゑ
一そうめんハ　おうべ
一えんそくハ　みやし
一えびハ　ゆ
一でんぐハ　おでん
一ひげハ　ゆまむ
一まつゆハ　おまつ
一るまびハ　ちまと
一みりんハ　ひだ
一わらうハ　わらく
一えらんハ　えもの
一でゝハ　うん
一ゝのあハ　うく
一くくハ　くず
一まつけハ　まり

二像院擬宝珠

我神は志ほ
ひふえ
ぬ
沖れ
石の
人を
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

一たけのこハ　こけ
一ーかハ　ちゝのこ
一ゑれきハ　ゑぐく
一いもハ　おむ
一たこハ　たり
一ごまめハ　このこ
一すゑハ　すく
一ちゝハ　すり
一ゑびハ　ゑり
一ゆ百ゑハ　一下すど
一なべうまハ　くろ
一いくさハ　せんり
一まつ木ハ　こぐ
一ちゝしハ　ちゝや
一せろくいハ　うぐひす
一ゑかるこハ　ついまろ

鎌倉右大臣

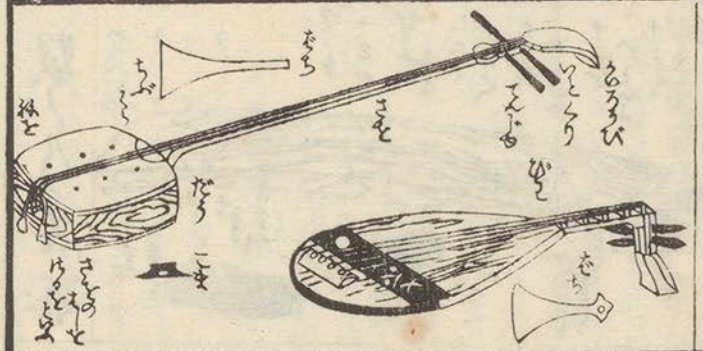
世れ中ハ
常も
がな
清らぐ
あ海の小舟
つふく
うふ
ゝ

琴三絃乃事

琴ハ楽器乃一つにして
乃琴ハもと唐土より
たゝ一日おこりて
字多天皇乃時に
石川乃通ると
絃ハ麦ハ
て筆れあくをつく
長けくそまつると
乃ひしハ弓六張と
てひさかたし
久く今日本朝乃
三絃ハ既成
けるあり
陰茎
ひさかたひ
あるまいさゝのく

琴乃名所

三絃の名所



入道お大臣

花さそふ
あらしの
庭の
雪ならぐ
ゆり拾ふのは
我身なりけり

十二月の和名

一月 初空月 暁月
初鬼月 子月 歳神月
二月 衣更月 梅月
小草月
三月 弥生 桃月
若月 来生月
四月 卯月 花月
花月 水月
五月 皐月 鶯月
月宮月 橘月
六月 水無月 風月
常夜月 神月

檜中納言定家
ものいふ人を
まつかの
浦
夕なぎ
焼くやもしほの
身もこがれつつ

七月　文月　親月
夕雨月　七夕月　女月
八月　葉月　月月
秋月　紅葉月　中秋
九月　長月　稲秋
秋雨月　小田刈　寝覚月
十月　神無月　時雨月
小春月　初春月
十一月　霜月　雪月
霜降月　神楽月
十二月　四極　表月
乙月　梅月　除月

うんこう日

正月　ひつじ　二月　いぬ
三月　うし　四月　とら
五月　むま　六月　ね
七月　とり　八月　さる
九月　い　十月　ね
十月　し　十二月　う

うけむけのる

木性　とらうまさるとり
火性　ねうまいぬ　ひつじいとり
土水　むまるねとうさる
金性　うなとうとり　ひつじいぬ

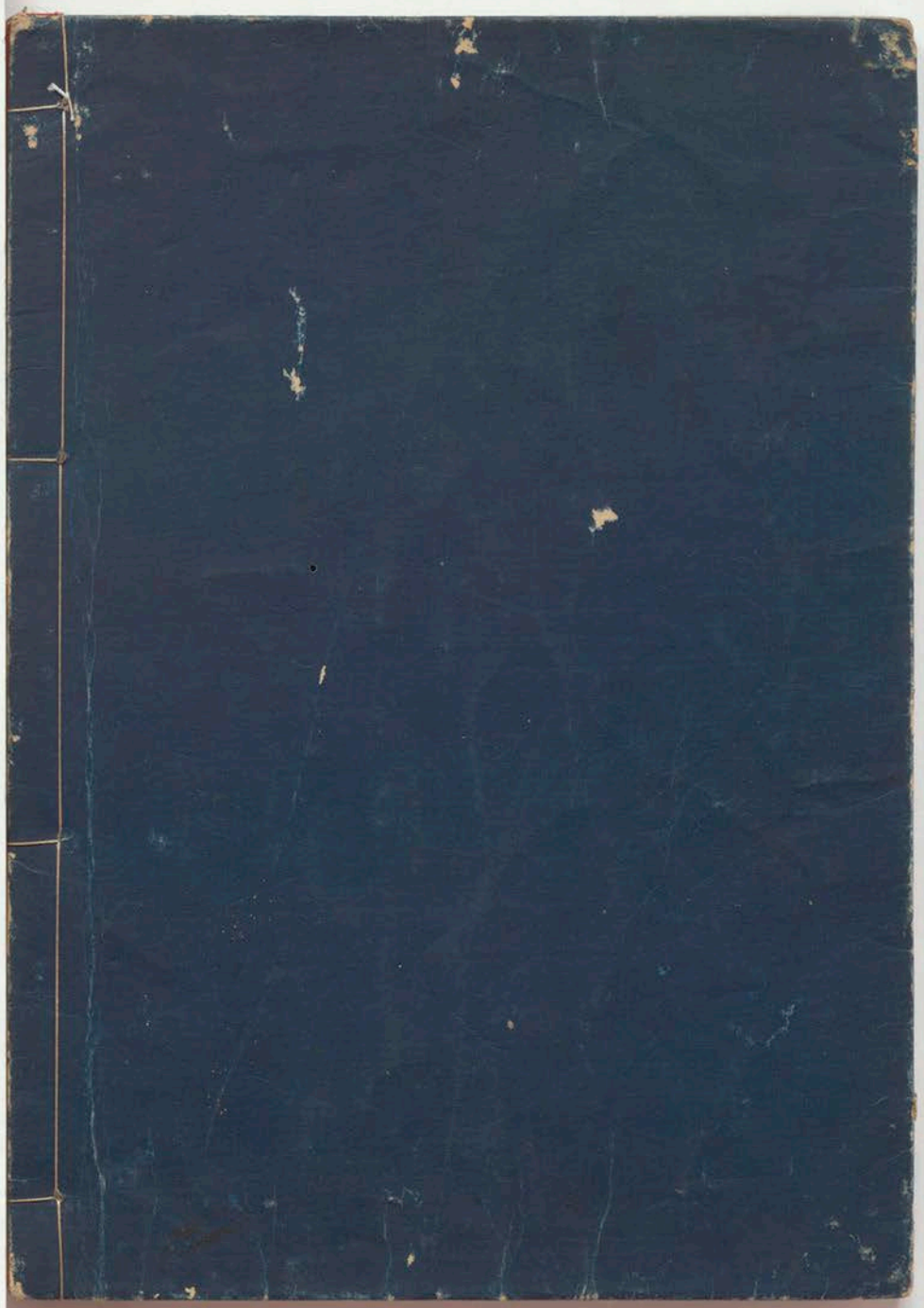
守本尊と知る歌

孫ハせんとものしるべとなるべくうくりんとものにてろくしゃげんぞ
むまさいーひつじとさるとうまとろくとうとうとう

141463

不成就日之事

正七月　三日　十一日　十九日　廿七日
二八月　二日　十日　十八日　廿六日
三九月　一日　九日　十七日　廿五日
四十月　四日　十二日　廿日　廿八日
五十一月　八日　十三日　廿一日　廿九日
六十二月　六日　十四日　廿二日　廿日

願ぶつ　しゅ　四日

正月ろく　五月う　九月さる
二月ミ　六月ひま　十月ゆ
三月さる　七月ろう　十一月いぬ
四月い　八月ね　十二月ね